

依人位可用候、

〔守貞漫稿三履十〕弘化以來雨。天傘。京坂ニ製ス、女子ノ所有歟、淡墨紙張風色、僅ニ荏油ヲ注ギ、而モ形

ハ日傘也、日傘ハカウバイ淺ク、雨傘ハ聊カ深キ、亘概三尺二三寸、江戸モ男女トモ、晴雨不決ノ日

携之テ、晴ニハ日傘ニ用ヒ、雨ニモ用之テ、暫時ヲ凌グ、故ニ雨天ノ名アリ、頃日婦女ハ、快晴ニモ專

ラ用之、雨天傘ハ形ハ日傘也、日傘ハ雨傘ノ如ク大ナラズ、又雨傘ハ深ク、日傘ハ淺キ也、此雨天傘、小民男女今ハ霖雨ニモ用之者稀ニ有之、

〔貞丈雜記八調度〕一裝束の傘スル也、白袋ニ入、廣サ八尺を本とする也、弓持テ馬に乗る時、弓の雨

にぬれぬほどにする故如此也、此事鎌倉年中行事に見えたり、

〔成氏年中行事正月〕五日ノ夜御行始、略中裝束之傘ト云ハ、八尺ヲ本トス、

〔青標紙〕武器及行列具的例

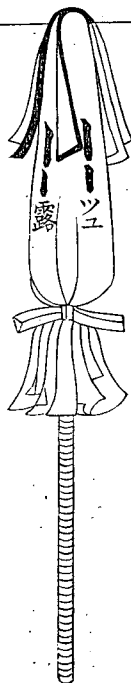
參。内傘は袋のはしに布をたれ、飾の革を添るなり、垂たる布は全體沓をいれるための袋なり、天

明年中、傳奏久我大納言殿下乗の時、沓の甲はなれたれば、袋の沓を出して用ひられたるなり、

〔我衣〕參内傘ハ常ニハナシ、御規式ノ節用之、少將以上用之、シカレドモ家柄ニヨリテ持、十萬石以

上ノ物ナリ、略○圖

〔守貞漫稿三履十〕袋入傘 俗に參内傘ト云



露ノ端革三枚宛

袋白晒麻布、紐同平結柄、密藤卷上ニ革ノ露ヲ付ル、

〔諸國咄〕傘の御託宣 慈悲の段

慈悲の世の中とて、諸人のために好き事をして置くは、紀州掛作の観音の貸傘。二十本なり、昔よ